

天草・島原・長崎の世界文化遺産を巡るフィールドトリップ —2025（令和7）年度「地理学研究」および「社会科教育実践演習-地理-」 （大学院）の覚え書き—

香川貴志^{*1}

Field Trip to Visit the UNESCO World Heritage Sites in Amakusa, Shimabara, and
Nagasaki: Memorandum from a Field Trip Conducted in August 2025

Takashi KAGAWA

抄 録：筆者は1991年に本学に着任し、以来35年間にわたって地理学や地誌学の教育と研究に携わってきた。2026年3月末日を以て定年退職を迎えるため、多くの学生たちの人気を博した本授業科目は今年度が最終回となる（偶数年開講の姉妹科目「地理学特講」は昨年度が最終回だった）、文献研究や地形図読図演習で現地事情をあらかじめ学び、学習した内容を現地解説・現地確認のうえ議論に発展させる一連の所作は、地理学を学ぶ専門科目の設置が僅少な本学では、地理学の本質や方法に触れる絶好の科目だった。そこで筆者は、後任の地理学教員が採用された場合に備えて、最終年度の本授業科目のアウトラインを残しておくことにした。本文で触れる過去の備忘録とともに、本稿には筆者が築き上げてきた文献研究からフィールドワークに至るまでのエッセンスが詰め込まれている。

キーワード：世界文化遺産、フィールドトリップ、多人数授業、天草、島原、長崎

I. 本授業科目を取り巻く環境と本稿の目的

本授業科目は、文献研究や地形図読図などの地理学の基礎をデスクワーク（インドアワーク）で学び、これらの学びを現地でホンモノと対峙し、担当者による現地解説を受けて議論に発展させる、通常の講義科目とは方法が大きく異なる演習的な科目である。その意義は、本学が初等・中等教育教員の養成を旨とする大学であることを踏まえれば自明である。学生たちの大多数は、卒業後に教員になることを夢見て日々の勉学に勤しんでいるので、卒業後の彼ら/彼女らが上質な授業を実践できるようにするのは本学で最重要の責務であるといっても過言ではない。

ここで本授業科目が設置されている社会領域専攻についてみると、小学校社会科は第3学年から5学年の大部分と第6学年の一部が地理的な内容で、中学校社会科では地理的分野が必修である。また、高等学校では2022年度よりカリキュラムの見直しを実施され、現行の学習指導要領のもとに「地理総合」が必修科目となった。このように、地理的な素養は校種を問わず重要な一方、そこで欠かすことのできない「文献等の資料の精読、訪問地域の地形図読図、これら事前に学んだ内容について現地で解説を受け議論につなげる」というプロセスは、どうしても地理学を集中的に学ぶ理学部や文学部の学生たちに比べて劣ってしまう。しかし、本学の学生たちは、卒業後に教員になると、とくに高等学校では理学部や文学部で地理学を専攻してきた同僚と授業の内容や質、教材の適否、授業実践の巧拙を必然的に比べられてしまう。こうした局面において、大きく見劣りしない、あるいは理学部や文学部で地理学を集中的に学んだ同僚に比肩できる、さらに凌駕できる人材を、教員養成系大学・学部でも育成しておかなければならない。

教員養成系大学・学部の専任教員数は、財政的な理由により年々縮小しており、しかも教職大学院への移行に

*1 京都教育大学

伴って教育職員免許の申請要件を満たす基準が大幅に緩和された。たとえば地理歴史系の分野についてみると、従前は「地理学または地誌学」「日本史学」「外国史学（東洋・西洋を問わず）」が各 1 名であったところ、現在は「地歴系で 3 名いれば良い」というように変更された。ここで細かな研究分野は問われないので、極端な場合は 3 名全員が日本古代史という場合でも、地歴系に限れば教育職員免許を申請できる教育機関として認められる。公民系についても同様に分野を問わず 3 名、これに加えて入学定員 800 名未満の大学（本学はこれに相当）の場合、教員の所属学科を問わず教科教育の授業さえ開設されていれば組織運営は可能である。つまり、中学校社会科と高等学校地理歴史科・公民科の免許申請要件が整う。教職に就いた際の専門的知識の充実を視程に収めれば、これは決して望ましい状態ではない。行政的・制度的に早期の改善が切望される。

ところで本稿の目的は、冒頭で述べたように「優秀な社会科・地理歴史科教員の養成を図るために実施した本授業科目の方法や内容が継承できる資料を残す」ということに尽きる。かなりのボリュームになる事前学習での文献研究については、香川（2026a, 2026b, 2026c）にまとめたので、本稿で扱う事前学習は地形図読図が中心になる。したがって、以下の本稿の構成は、Ⅱでは授業設計と受講生募集、Ⅲは事前学習のアウトライン、Ⅳにおいて現地授業の実施記録と課題の指摘、Ⅴで成績評価や今後の展望、これらを順次記載することになる。同様の授業を実践している教育機関は珍しくないはずなので、同じ地域で授業を実践する場合、異なる地域であっても同等の授業設計・実践する場合の参考になれば幸いである。過去に実施した地域を振り返ると表 1 のようになる。複数回にわたり訪問している地域もあるが、これまでに同一地域を連続して訪問したことはない。また、近い将来に本学に着任するだろう地理学専任教員には、「かつてこういう授業もあった」とご笑覧のうえ、たとえ僅かであっても本稿を活用いただければ望外の喜びである。

Ⅱ. 授業設計と受講生募集から受講生確定まで

2.1 授業の設計—「世界遺産の教材化」と「地歴融合の教育実践」—

筆者は本授業科目の訪問先について数年前から天草・島原・長崎で実施することに決めており、学会出張や科研費での出張の際に訪問予定地の下見調査を何度か積み重ねた。長崎には既に数多の訪問経験、本授業科目や姉妹科目での授業実践の経験があったが、今回の授業設計に着手して以降、天草へは 3 度、島原へは 2 度の訪問を果たした。従前より筆者は、自身の訪問経験が無い場所では授業を実施しないことにしている。これは相応の事情を知る地域でなければ計画を立てにくいこと（とくにトイレの場所、公共交通機関や道路の混雑状況、コインロッカーの有無などの現実的な利便性が鍵になる）、多人数での移動や宿泊となった場合の対応の難易を考えてのことである。

訪問地域の大枠が決まると、現地授業のテーマを模索し、それをシラバスに記すべく試行錯誤を繰り返す。2024 年の秋季に草稿の作成に着手した本授業科目のシラバスには、授業の目標として「世界遺産の教材化」と「地歴融合の教育実践」を掲げた。前者については、義務教育段階で多用されるテーマであるうえ、今回の訪問予定地には世界文化遺産の構成要素 5 点が所在するため、これを含めない選択はなかった。受講生の多くは地理学ゼミの学生ではなく（今回の受講生では現地で同一行程となる大学院学生（以下、大学院生と記す）を含めて地理学を専攻する学生は 5 名）、歴史に関心を持つ者が珍しくないことから、この主題設定は適切であったと考えている。このことに関連するが、「地歴融合」については、高等学校地理歴史科で「地理総合」が 2022 年度から必修化され、多くの自治体の教育委員会や国立・私立学校で『地理総合』の授業ができる教員が切望されている状況に鑑みて、時宜を得た必要度の高いテーマだといえよう。

本授業科目が前期開講の集中実施科目であるので、成績報告期限との関係で 8 月末までに現地授業を終えないといけない。さらに卒業該当学年の学生が受講登録することがあるので、教員採用試験の二次選考と重複し難しい時期を選ぶ必要もある。また、3 回生は 8 月下旬から主免実習が始まるので、それについての配慮も要する。学外の事情を勘案すれば宿舍の予約が難しく価格も高騰する「盆休み」も実施期間から外さないといけない。こうした事情から、現地集合が 8 月 20 日前後、現地解散がその翌々日というスケジュールが導出される。

表1 学内外の雑誌に文献として記録が残っている現地授業対象地域と掲載雑誌

実施年 注1)	実施地域 注2)	実施記録収録誌 注3)	巻号	掲載頁	発行年
2002	東京メトロ銀座線沿線	教育実践研究紀要	3	27-38	2003
2004	日高・札幌	教育実践研究紀要	5	33-43	2005
2006	長崎市街・端島	教育実践研究紀要	7	1-10	2007
2008	函館・札幌・小樽	教育実践研究紀要	9	1-10	2009
2009	松山	教育実践研究紀要	10	13-22	2010
2010	津和野・萩・石見銀山	教育実践研究紀要	11	1-11	2011
2011	高松・宇多津・琴平	教育実践研究紀要	12	1-13	2012
2012	八郎潟・弘前・函館	教育実践研究紀要	13	11-21	2013
2013	三陸被災地(大学院, 3月実施)	京都教育大学紀要	123	31-45	2013
2013	長崎市街	教育実践研究紀要	14	11-20	2014
		教育実践研究紀要	15	21-31	2015
2014	神戸・淡路島	環境教育研究年報	23	777-15	2015
		環境教育研究年報	23	17-25	2015
		教育実践研究紀要	16	1-10	2016
2015	門司港・豊後高田・別府	環境教育研究年報	24	1-10	2016
		環境教育研究年報	24	1-14	2016
		教育実践研究紀要	17	1-10	2017
2016	飛騨・富山市街	環境教育研究年報	25	31-44	2017
		環境教育研究年報	25	45-66	2017
		教育実践研究紀要	18	1-10	2018
2017	三陸被災地	環境教育研究年報	26	25-37	2018
		環境教育研究年報	26	39-56	2018
		新地理	67(2)	20-30	2019
2018	卯之町・内子	環境教育研究年報	27	53-64	2019
		環境教育研究年報	28	37-51	2020
2019	会津	環境教育研究年報	28	53-64	2020
		環境教育研究年報	29	1-1 2	2021
2020	妻籠・奈良井・木曾平沢	環境教育研究年報	29	13-28	2021
		環境教育研究年報	30	57-72	2022
2021	出雲・石見銀山・萩・津和野	環境教育研究年報	30	73-86	2022
		環境教育研究年報	30	87-102	2022
		環境教育研究年報	31	39-53	2023
2022	丹後半島・舞鶴	環境教育研究年報	31	55-69	2023
		環境教育研究年報	31	71-85	2023
		環境教育研究年報	32	33-45	2024
2023	三陸被災地	環境教育研究年報	32	47-58	2024
		環境教育研究年報	32	59-72	2024
		環境教育研究年報	33	37-50	2025
2024	小豆島	環境教育研究年報	33	51-60	2025
		環境教育研究年報	33	61-70	2025
		教育実践研究紀要	8	99-108	2026
2025	天草・島原・長崎	環境教育研究年報	34	11-24	2026
		環境教育研究年報	34	25-39	2026
		環境教育研究年報	34	41-55	2026

注1) 実施年は年度(Fiscal year)ではなく1~12月の暦年(CE: Common era)にて表記している。

注2) 実施地域は代表的な地域名や地名、都市名で表記した。

注3) 『教育実践研究紀要』と『環境教育研究年報』の正式名は、それぞれの頭に「京都教育大学」が付される。ただし、2026年の『教育実践研究紀要』は2019年に組織改編に伴って再発行した同名の別雑誌で、その正式名称は『京都教育大学 教職キャリア高度化センター 教育実践研究紀要』という。

また、『新地理』は、日本地理教育学会が発行する査読制の機関誌である。



図1 今回の授業における第1日目の行程

- ① 本渡バスセンタ（集合場所） ② 崎津教会・河浦集落 ③ 富岡城址 ④ 鬼池港
 ⑤ 口之津港 ⑥ 原城址 ⑦ がまだすドーム ⑧ 矢太樓南館

*地図中の④鬼池港～⑤口之津港はフェリーで移動。

(資料) 地理院地図 (GSI Maps)

現地集合は恒例のものである。受講生は自主的に動ける大学生なので、今回の授業もこの例に漏れなかった。ただ、現地授業の訪問地との関係により、天草市中心部の本渡バスセンターに8月20日7:30の集合が必要だった。そのため、受講生と筆者は現地での前泊が必要となった。前泊は過去にも遠方では何度か前例がある。

本渡バスセンターからは、受講生の多寡に関わらず借上げバスで移動する計画を立て、前頁の図1に示した行程で8月20日・21の両日に連泊する長崎市まで、エクステンシブ型の行程を設計した。中途のフェリー利用区間（鬼池港→口之津港）はバスでは渡らず、熊本県側と長崎県側で各々の地元バス会社を利用する計画を立案した。今回は結果的に学部学生と大学院生の合計が45名、大学院修了生で中学校の現職教員（男性）が1名、引率指導に携わった筆者が1名、以上の47名での移動となった。そもそも最初の訪問地の崎津教会がある河浦地区までは本渡から直行バスが無く、路線バスはマイクロバスであることを下見調査の際に確認済みであったので、借上げバスの利用は最適解だった。近年は受講生の大部分がキャスター付きの小型・中型スーツケースを持参するため、これらを大人数で公共交通機関に持ち込むこと自体が一般利用者の迷惑になる。

本渡バスセンターを発ってからの下車地点は、下見調査で確認したトイレや売店の情報も加味して決めた。途中での下車見学地点図1に順序通りに番号を付した。その内訳は次のとおりである。なお、図1の中では番号に枠（たとえば①、②…）を施したが、本稿の本文では番号のみを記した。もちろん両者は対応する。1：本渡バスセンター、2：河浦地区（崎津教会）、3：富岡城址（陸繋島と砂嘴の海岸地形）、4：鬼池港、5：口之津港、6：原城址、7：がまだすドーム（雲仙岳災害記念館）、8：長崎市内の宿舎（矢太樓南館）、以上の全ての地点には規模の大小はあるもののトイレがある。

2.2 受講登録と受講生の確定

受講登録がオンライン登録になってから既に久しい。今回は、訪問地域が学生たちにとって魅力に満ちて映ったのか、筆者が担当する「地理学研究」の最終回になることが何らかの影響を及ぼしたのか、登録開始後の瞬間に受講希望者が40名を超え、教務課長より「人数オーバーしてしまうかもしれません」との電話が入った。受講生が予定数を超えた場合は、優先順位を付けて選別（基本的に上回生を優先）することをシラバスに明記していたので、著しい超過が生じた場合は規準にしたがって受講生を選別するつもりだった。

ところが上手い具合に、受講希望者は当初の制限をわずかに超えたところで落ち着いた。そのため全員の受講を認めた。この人数が上述した学部40名、大学院5名である。大学院生のうち2名は、現地授業を共通実施する（授業内容は若干異なる）「社会科教育実践演習・地理」を履修済み（つまりM1の時に小豆島での授業を受講済み）のため、学部の「地理学研究」を学部聴講科目として履修した。ここまでして連続受講してくれることは、授業担当者として筆舌に尽くしがたい喜びを感じる。その後、大学院修了生である現職教員が加わった。学年や性別による内訳は次のとおりで、学部学生は全員が社会領域専攻、大学院生は全員が公共・文化プログラム社会科教育専修の学生である。2回生9名（女子9名）、3回生28名（男子16名、女子12名）、4回生3名（男子3名）、大学院M1生3名（男子2名、女子1名）、大学院M2生2名（男子2名）である。

このように学部学生は3学年にまたがり、男女比が「男子：女子＝23：22」というバランスの取れた集団ができあがった。

Ⅲ. 事前学習のアウトライン—文献研究と地形図読図—

この章では、本授業科目が事前学習5コマ（10時間）と現地授業10コマ（20時間）から成り立っていることから、事前学習のアウトラインをまとめておく。なお、文献研究については、香川（2026a, 2026b, 2026c）で詳述し、とくに香川（2026b, 2026c）には文献研究の成果である各文献のキーワードと要旨をまとめているので、本章ではごく簡単な内容紹介に留める。ここでは上述した一連の文献では触れていない地形図読図について、多くの方々にご活用いただけるよう演習問題と解説書に類似した体裁の記事を掲載した。

3.1 第1回事前学習会, 2025年4月26日(土) —授業ガイダンスと文献精読パッケージの担当者決定—

この事前学習会は、本授業科目と「地理学特講」(偶数年開講)の慣例に従って土曜日に昼食を摂った状態で集合してもらい12:00～15:10に時間を設定した。この方法はのちに述べる第2回事前学習会、第3回事前学習会でも同様である。ただし、第3回事前学習会は、最適な土曜日に教職大学院の入試が行われたため、日曜日の12:00～13:30に実施した。

主な授業内容は、①訪問予定地を巡る行程、②各々の箇所での「学び」についての概略、③文献研究の方法、④文献精読パッケージによる担当者決定である。このうち①と②はごく一般的なもので詳述するまでもないのだが、①ガイダンスでは成績評価の方法について丁寧に説明した。これだけの受講生数になるとGPAの基準に耐え得る評価が求められるため、各種提出物や現地行動での授業への取り組み(その多くは現地での課題で判断)を基盤として、まず絶対評価をしたのちに、それをGPA基準にしたがって相対化することを説明した。

本授業科目のような宿泊を伴う授業では、どうしても受講生たちと共有した現地での思い出が蓄積してしまい、往々にして成績評価基準が甘い方向へシフトしてしまいがちである。学生たちも「楽勝科目」と捉えがちなので、筆者は絶えず心を鬼にして多人数になったときの本授業科目で「評価の相対化」を行ってきた。

ここで受講生に事前に必ず伝えることがある。それは「大多数の皆さんはとてよく出来ていることが多いですが、成績評価をルーズにすると当該大学がルーズな『好成绩の安売り大学』とみなされてしまいます。ほとんどの場合、受講生の成績に大差はありません。しかし、相対化すればどうしても「秀」「優」と「可」は稀有になり、「良」がとて多くなります。どうか成績評価の結果をみて一喜一憂しないでください。皆さんが決して楽ではない文献研究で身につけた知識と技能は、卒業論文を書くときに間違いなく大いに役立ちます。そしてそれを通じて学んだことを現地で確認して感動した喜びは生涯にわたり色褪せることはありません。私たちは、こうした経験の共有のために現地へ赴くのです」というものである。

このように伝えるようにして既に10年前後が経った。この間、本授業科目と「地理学特講」で成績の疑義照会を受けたことは一度もない。現地授業の楽しさを体感した受講生が「成績は二の次、事前に知識を身につけ、それと現地で出会う感動は何物にも代え難い。「これぞPriceless」と感じてくれているからだろう。

3.2 第2回事前学習会, 2025年7月5日(土) —地形図読図模擬問題と入学試験過去問の解答作成演習—

第2回事前学習会は、2コマある前半1コマを今回の現地授業の集合地点に近い天草市本渡の本渡瀬戸(ほんどせど)の3時時点の新旧地形図を活用した読図模擬問題の解答案作成に費やした。また、2コマある後半1コマを本学の2025年度社会領域専攻後期日程の小論文問題を活用した解答案作成とした。

3.2.1 地形図読図演習の意義と内容の具体

地形図読図は、慣れないと手が着けられない難物だが、「地理的な見方・考え方」のセンスが磨かれてくると、短時間で正解に至れる。高等学校で「地理総合」が履修修化された2022年度からのカリキュラムで学んだ大学生は、2025年現在では現役合格で進学してきた1回生だけである。したがって、高等学校時代に文系クラスで学んだと考えられる今回の受講生は、大多数が「地理A」「地理B」の履修経験がないと推察される。

このような属性を示す学生たちが、無事に大願成就を成し遂げ教壇に立った場合、地形図の読図に慣れていなければ、おそらく指導書と首っ引きで授業案を作成し、盤石の自信を持ってないまま「生徒から鋭い質問が飛んで来たらどう答えればよいのか」と気が進まないコンディションで教壇に立つに違いない。そうした「地形図読図が苦手な先生」を輩出しないよう、とくに理学部や文学部の地理学関連専攻のように豊富な開講科目を持たない教員養成系大学・学部では、少なくとも何度かの地形図読図をしておく必要がある。

上述したような懸念に鑑みれば、こうした地形図読図の授業を実践できる機会は、筆者にとって今年度が最後になる。さらに筆者の定年退職後に後任の地理学教員が無事に着任するまでは、水準の高い地形図読図演習は実施自体がかなり難しい、あるいは不可能になってしまう。そこで、筆者が改めて近年の大学入試や教員採用試験を徹底研究して、そこで見出された傾向を踏まえて地形図読図の模擬問題を今年度も作ることにした。上述した調査研究の結果、近年の地形図読図問題には「同一地域の新旧地形図を活用して、当該地域の自然的・人文的な

地域変化を解説する」という出題傾向がみられることを再確認した。この傾向は数年前、既に確認済みであったので、近年は動態地誌学的に地域変化を読み取ることがトレンドとして定着しているようだ。

こうした出題傾向のなかでも注目されるのが、市街地の拡大、土地利用の変化、写真撮影場所の選択（とくに過去の大学入試センター試験、現在の大学入学共通テストは写真と地図との併用が多い）、港湾地区の変化（埋立てや堤防の増設）、そして交通路の変遷である。これらの事物は、いずれも地域変化に関する「目の着けどころ」や「多くの地域でみられる一般的傾向の他地域への応用」が試される対象ばかりである。

そこで今回は、天草上島（熊本に近い東側に位置する部分）と天草下島（熊本から遠い西側に位置する部分）の境界をなす本渡瀬戸を含む狭い範囲の新旧地形図を3時点で並列し、この間の変化を読解させる模擬問題を作成し、その解答例と解説記事（正誤解説）を作成してもらった。下の図2は、設問に使った新旧の地形図である。

模擬問題

新旧の地形図3枚（左・中・右）からなる図2を参照して、そこから読み取れることからの説明文として誤っているものを次の①～④のうちから1つ選びなさい。また、①～④の全ての選択肢について、正誤判断に至った根拠を記しなさい。なお、図の中央部を南北に通じる水路は船舶が航行する海峡であり、その東西は別の島（東側：天草上島、西側：天草下島）である。

- ① 瀬戸大橋の開通にともなって、瀬戸開閉橋は旧来あった橋の名称を継承してわずかに北側へ移設された。
- ② 幅を狭めたものの瀬戸大橋の開通後も瀬戸開閉橋が残ったのは、歩行者の利便性確保を図ったものである。
- ③ 右図の本渡港付近は、道路が南側へ迂回することなく東西兩岸を結べるように天草未来大橋が建設された。
- ④ 海岸付近では、流入土砂の増加や浚渫工事の停滞にともなって、干潟が徐々に拡大する傾向にある。

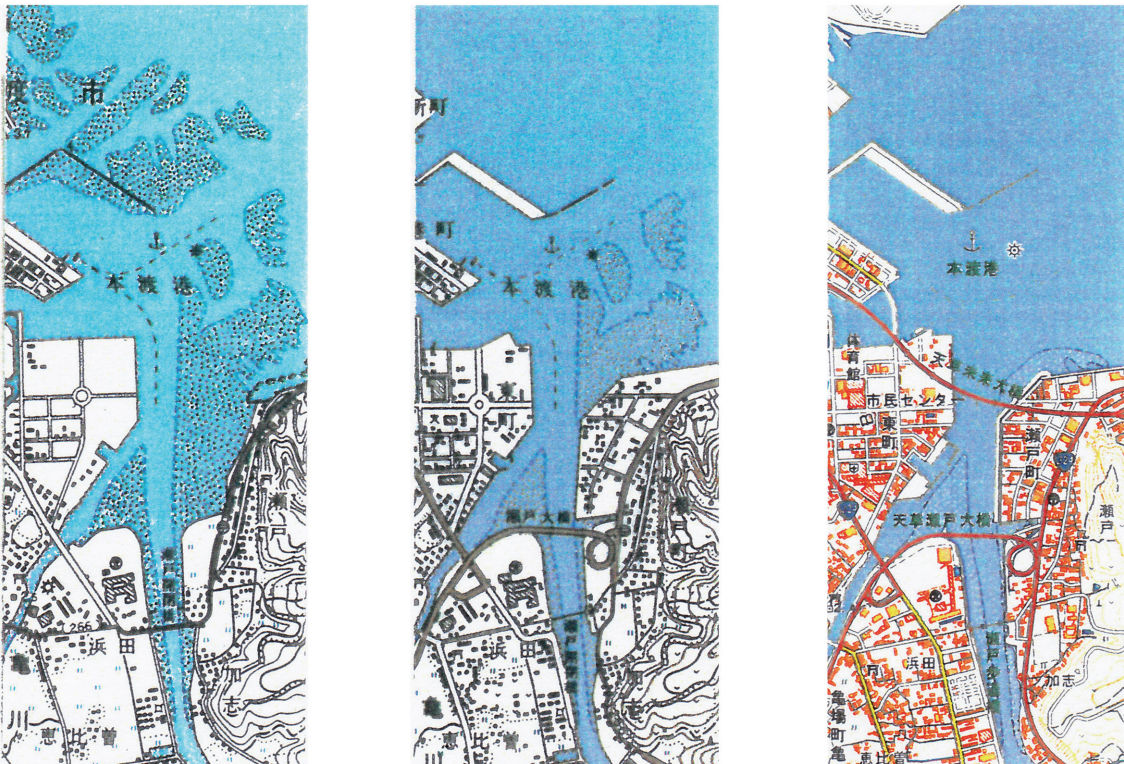


図2 天草市の本渡瀬戸付近の新旧地形図

【縮尺：各々の図の縦（南北）方向が2.5km，横（東西）方向が1.0km】

左図：1/25,000「本渡」（NI-52-12-14-1），1969年（昭和44）年7月30日発行。

中図：1/25,000「本渡」（NI-52-12-14-1），1981年（昭和56）年1月31日発行。

右図：地理院地図（GSI Maps），2025年7月4日閲覧・複写。

前頁に示した、3枚の新旧地形図の読図問題の解答案と各選択肢の解説文を作成してもらったのち、下にまとめた「模擬問題の各選択肢の解説と正解」を配布した。正解とならない選択肢についても、その正誤判断の根拠を考える習慣をつけておけば、教壇に立った際の問題解説（解答に至るまでの考え方や方法）がわかりやすく説得力のあるものになるだろう。もっとも、入学試験や教員採用試験では、確証のもとに正解を導出できればそれで十分である。しかし、上述した「確証」を得るには経験を重ねた正誤判断が決め手となる。

模擬問題の各選択肢の解説と正解

- ① 瀬戸大橋（せどおおはし）が開通して、自動車交通は新しいルートを経由することで橋の開閉で待たされることが無くなった。自動車も通行できた旧来の瀬戸開閉橋は解体され、歩行者専用の新しい瀬戸開閉橋が旧来の橋の名称を継承してわずかに北側へ移設されたことがわかる。この橋は、瀬戸大橋を歩行者が渡るのは距離的なロスが大きいと、歩行者の利便性を確保するために開閉橋が存続することになった。
- ② 上の①の解説文に記したように、ループによって船舶航行が可能な高度を稼いでいる瀬戸大橋は、自動車に優しい一方で歩行者には長い距離の移動と高度さの克服で辛苦を強いることになる。多少の待ち時間が生じてもループを登る必要がない瀬戸開閉橋は、歩行者の利便性を確保するために架橋された「思い遣りに満ちた橋」といえる。
- ③ 天草市の中心都市である本渡では、古くから存在した本渡瀬戸兩岸の市街地が、徐々に北部の本渡港の方向へと拡大した。そのことは、本渡港周辺の市街地の区画が整っている様子、埋立地の拡大から読み取ることができる。本渡瀬戸大橋は新しい市街地の南部では利便性が高い一方、その北部では天草下島（本渡瀬戸の東側）との往來の利便性が少し劣っていた。この不便を解消するためにループを伴わない天草未来大橋が建設された。
- ④ 干潟は、海洋部にみられる不規則で小さなドット（点）で地図表現される。その面的な推移を3枚の地図を比較しつつ精査すると、その範囲が徐々に縮小している変化を読み取ることができる。船舶の大型化はすなわち喫水の拡大を意味するので、港湾周辺の干潟は、浚渫工事の徹底などによって全国的にみても縮小傾向にある。干潟は決して拡大していないので、この選択肢の説明は誤っている。したがって、模擬問題の正解として選ぶべき選択肢は④である。

正解 ④

今回の地形図読図演習は少し簡単だったのか、第2回事前学習会の出席者40名（5名が課外活動等で欠席）のうち、不正解者は3名で全員が2回生女子だった。地形図読図のごく基本的な教育は2回生前期配当の「地理学概論」でわずかに施しているが、他の事項にも触れる必要がある制約の中では決して十分ではない。多くの自治体で教員採用試験の受験対象者が3回生に拡大されたこともあり、その準備のなかで自主的に問題演習に励む3回生もいるだろうし、実際に筆者の研究室に教を請いに訪ねてくる学生も多い。こうした学生には、本授業科目と偶数年開講科目「地理学研究」の過去の演習課題を解くよう勧めることも多い。学部学生の3回生と4回生、そして大学院生の全員が正解に至れたことは、こうした平時の取組みが少なからず奏功しているような気がする。

上述した不正解者の誤答は、全てが③を選択していた。地形図に掲載された領域を俯瞰的な観点から眺めることが③の正誤判断には不可欠である。隣席に着座して少し相談をしたのかもしれない。本授業科目における地形図読図の目的は、「正解を導出する」ことではなく「正解に至るまでのプロセスや考え方を知る」ことである。したがって、誤答が誤った解説案を誘発するというデメリットもある。いずれにせよ、上に示した『模擬問題の各選択肢の解説と正解』を熟読しておけば、少なからず地形図読図の面白さに気付いてくれる学生が増えるはずである。筆者の後任となる地理学教員が着任するまで、生活環境をトータルで考える授業や演習の実施が現在に比して困難になる懸念を払拭できない。一刻も早い状況の改善が切望される。

3.2.2 入学試験過去問の解答作成演習

第2回事前学習会の後半にあたる2コマ目は、本節の冒頭にも記したように「本学の2025年度社会領域専攻後期日程（2025年3月実施）の小論文問題を活用した解答案作成」に取り組んだ。この入学試験の素材となったのが、

高島教師の会編著（1989）『わたしは高島が好きです—閉山 長崎県鷹島町立高島小学校の教師と子どもの記録—』である。今回の授業では全員が揃って高島に上陸することはないものの、受講生が最も楽しみにしていた端島（軍艦島）を町域に持っていた西彼杵郡高島町は、端島より長く1986年11月27日に閉山の日を迎えるまで採炭を続けた島で、本書は閉山直前直後の高島小学校における児童や教員の状況が当代クロニクル的なタッチでまとめられた、魂を揺さぶられるような力作である。

この書籍は、科研費で小学校社会科副読本の研究をしている際の検索で筆者の目に留まったもので、それを本学社会領域専攻の入試問題作成の責任者だった筆者が素材に選んだ。本書には児童や教員の学校での葛藤、閉山に伴う転居で毎日のように高島から離れていく子どもたちとその家族、こうした異常な環境の下における授業の工夫が綴られていて、それが読む者の心に刺さり涙を誘う。

紙幅の都合と著作権の関係から問題文の転載は控えるが、事前学習のうちの1コマを使って解答案の作成に励む試みは時間的にも適切で、のちに多くの受講生から「問題文を読んでいて泣きそうになった」「最近読んだ文章の中では最も感動した」などの肯定的な意見が多く出てきた。解答案も総じて受験生とは比較にならない水準の仕上がりが見られており、筆者は大学での学びが学生を大きく成長させることに感嘆した。

3.3 第3回事前学習会（2025年7月27日（日）—『文献要旨集』の配布、事前集金、行程の最終確認—

例年通りであるが、第3回事前学習会は、事前集金（現地で利用する大型バスや宿泊先、施設入館等を円滑に進めるための団体入場経費等）、『文献要旨集・現地授業のしおり』の配布を実施した。この冊子を活用して最終的な現地授業の行程説明を行った。授業の実施時間は、1コマ分で12:00～13:30である。

上記の『文献要旨集・現地授業のしおり』は、これを使って「自身が担当したものを除く文献で最も精読してみたいものを各カテゴリー（8つのカテゴリーを地域別またはテーマ別に設けた）から1点ずつ選び、その選定理由を簡潔に記す」という課題にも使われるものである。この課題は、現地授業の第1日目に回収することも告げた。この一連の作業は、効率的に文献研究を進めるための情報共有を図ったもので、『文献要旨集・現地授業のしおり』の編集過程を含む詳細は、香川（2026a）にまとめている。併せてご覧いただきたい。

IV. 現地授業の実施記録と課題の指摘

今回の行程は、第1日目がほぼ終日にわたり借上げバスによる団体行動、第2日目が「軍艦島上陸クルーズ」から下船する正午近くまでが団体行動で、午後からは個人またはグループでの小単位での行動、第3日目が解散時まで第2日午後と同様の小単位での行動とした。長崎はインバウンド観光客も多い都市型観光地なので、こうした地域で50人近くの団体行動を行うことが憚られたためである。

こうした手法は従来も函館や小樽、飛騨高山、過去3回実施した長崎でも同様である。こうした行動は、単なる物見遊山の観光行動に陥りやすいため、事前学習における文献研究で知識を充実させておき、それを現地で確認する行動を促している。また、筆者から訪ねて欲しいスポットを紹介し、第2日目の夕食前には約1時間のミーティングを開いて、個人またはグループの小単位ごとに訪問地域と当該地点で得た感想を語ってもらい、それが第3日目の計画立案の際に役立つように配慮した。

4.1 現地授業第1日目（8月20日（水）、天草市本渡の12:00までの最高気温：33.2℃ [11:40]）

事前に借上げバス運行会社の九州産交バスより、本渡バスセンターの構造がわかるGoogle Mapsの写真を送信していただけたので、それを本学の教務システムを通じて受講生へ現地授業の約1週前に通知した。そのため、1名の遅刻者が出たものの、他は全員が集合時間に先駆けてバスに乗り込めた。最初の訪問地の崎津教会は無料ではあるがWeb予約を要する。その時間との関係もあり、我われは遅刻した学生を放置して出発した。遅刻者のモバイルフォンは一向につながらず、なにか事故でもあったのかと案じて当該学生の宿泊先へ崎津教会の近くから

電話して部屋の確認を依頼した。幸い事故ではなく、単なる寝過ごしであった。当該学生には島原方面へのフェリーが出港する鬼池港へ11:30に間に合うよう移動することを命じた。

崎津教会は天草下島の南西付近にある河浦集落の一角にあり、同集落の一部区域とともに世界文化遺産の構成要素に指定されている。大型バスの駐車場から教会までは徒歩10分程度を要するが、教会へ至るまでの道から望むリアス海岸の海は美しく遠方からも崎津教会が良く見える。第2日に提出を命じた第1日目の振り返りレポートを読むと、この風景が心に深く刻まれた学生たちが珍しくなかった。教会脇のスペースでは筆者が下見調査の際に得た教会や集落の説明をして、少人数のグループに分けて順次教会内に入ってもらった。この集落での滞在時間は約50分だったが、漁業設備や集落内の神社を尋ねても時間が不足することはなかった。

崎津教会を10:00少し過ぎに発って、一行は天草下島の西海岸を北上し10:50頃に次の訪問地である富岡城址に至った。陸繋島と砂嘴が発達した富岡の地形は、富岡城址から一望できる。ここを訪問したのは、今回の授業に自然地理学的な要素を盛り込みたかったからである。気温は陽射しが強かったものの、風が心地良い天候だったため、一行は快適さを感じつつ、国内でも稀有な地形を同時に観察できる贅沢を味わった。

ここから鬼池港までは天草下島の北海岸を進み、我われは正午頃に鬼池港に到着し、午前中にお世話になった九州産交バスと別れた。朝の出発時に遅刻した学生とも無事に合流できた。フェリーの出港時刻まで一行は待合室で体力温存・回復に努めた。大勢で食事ができるような設備がフェリーターミナルに整っていないことは下見調査時に確認済みだったので、受講生には朝の出発時に菓子パンなどの軽食を買っておくよう指示した。我われは各自が船内で自由昼食となったが、移動中に食事を摂ることは時間の有効活用に計り知れない効果がある。

約30分の航海を終えて到着した口之津港では、ここから島原を経て宿舎までお世話になる長崎県営バスが待機していた。受講生は予め指定しておいた座席へ効率的に乗り込み、バスの運転手は手際の良さに驚愕していた。乗り込む際の座席指定表は、バスの後部を上側にした座席表を作成して各自へ配布しておくとは非常に便利である。口之津港では、全員が乗り込んだのを確認して、当地が南蛮貿易で賑わった「外国への窓口」であったこと、これから訪問する原城（現在は原城址）が口之津港に大きく依存していたことなどを説明した。

ところが原城址へ近づくにつれて突然に雲が分厚くなり、猛烈な雨に襲われた。この天候では国道沿いのバス駐車場から原城址まで移動するのは難しいと判断し、やむなく車中で簡潔な解説を施した。この影響で少し予定時間より早く移動することになったが、次の訪問地である「がまだすドーム（雲仙岳災害記念館には14:00頃に到着できた。予定より約30分早い到着であった。

近年の防災・減災教育は、地震や津波に対する備えにやや偏りが見られるような気がする。日本では、地震・津波よりも発生頻度が格段に高い、台風や線状降水帯による降雨災害が全国各所で頻発し、小学校の社会科教科書や第3学年・第4学年を対象にした社会科副読本においても、破堤や越堤による洪水についての記載が多く認められる。ところが、火山災害に関する扱いは決して多くない。「がまだすドーム」は、雲仙普賢岳の噴火や火砕流（1991年6月3日の大火砕流はとくに著名）による被害を展示した施設で、2025年2月に下見で訪問した折には、リニューアルオープンに向けて改装工事が行われていた。その完成後の姿を観光案内所等で伺い、今回の授業で訪問することを決めた。

「がまだすドーム」では、他の入館者に迷惑をかけないよう団体での行動は慎み、バスに戻る時間を15:20に定めて関心のある展示をじっくりと観てもらうことにした。同館の見学を終える頃、ここに来る途中の豪雨はすっかり止み、時おり薄日も差す中を長崎市内の風頭山にある宿舎「矢太樓南館」を目指し、同所にはまだ明るい16:40頃に到着した。この宿舎は2000年、2006年、2012年に今回と同様の授業で長崎を訪問した折にも利用した宿である。ロビーや部屋（一部の部屋）からは長崎市内の夜景を観ることができ、食事の手配もできるので、この種の授業には使いやすい。

夕食の際、翌朝に提出してもらった現地授業第1日目のレポート用紙を配布し、『文献要旨集・現地行動のしおり』を活用した宿題（第3回事前学習会から現地授業の前夜までに仕上げていくべき宿題）を回収した。現地授業第1日目の課題は「今日の訪問地で最も印象に残った場所とその理由を記しなさい」というもので、宿題は「自身が担当しなかった文献から精読してみたいものを各カテゴリーから一つずつ選び、その理由を添えなさい」と

いうものである。情報共有を図る、この宿題のタイムパフォーマンスの高さは、香川（2026a）にまとめている。上記の課題と宿題はともに全ての受講生から提出を得た。

4.2 現地授業第2日目（8月21日（木）、長崎市の終日最高気温：33.5°C [14:30]）

この日は、前日に鹿児島県が台風被害を受け、九州新幹線の熊本～鹿児島中央の区間が始発から運転見合わせになっているなど、かなり先行き不安な天候だった。そのため「軍艦島上陸クルーズは外洋で少し揺れるかもしれない」と覚悟を決めた朝食後、船を運航する「やまさ海運」から「本日欠航」の電話が筆者のスマートフォンに入った。この授業では以前にも山陰本線が土砂崩れで不通になり、急きょ借上げバスを手配するなどの予期せぬトラブルに見舞われたことがあった。しかし「軍艦島上陸クルーズ」は大多数の受講生が今回の授業のハイライトと考えていたに違いないイベントだったので、彼ら/彼女らの落胆に思いを馳せるとやるせない気持ちに襲われた。

ただ、このように急な予定変更が必要になった場合は、「次なる目的地への移動利便性が突出して高い場所へ取りあえず移動する」というのが、筆者が長年の授業担当で身につけた、鉄則ともいえる最適解である。長崎市街地でこうした場所は、JR長崎駅（長崎県営バスターミナルを含む）、長崎新地ターミナル（新地中華街バス停）、長崎港ターミナル（大波止）の3カ所に限られる。

今回は「軍艦島上陸クルーズ」の出発場所が長崎港ターミナルだったので、既に長崎自動車（長崎バス）に定期路線バスへの分乗を連絡済みであったこともあり、これを利用して交通利便性が高い同所まで2班に分かれて移動した。分乗は多人数で路線バス（とくに平日の通勤時間帯）を利用する際の最低限のマナーである。

長崎港ターミナルに着くまで欠航を知らない受講生もいて、端島（軍艦島）へ渡れないことを告げると落胆の悲鳴が上がった。筆者にはどうにもできないことだった。筆者は受講生に「天候による欠航なので、船会社がプロの判断で苦渋の欠航判断に至ったものと考えられます。こういう場合は、現地在『また来てください』と囁いていると理解して深く落胆せず、リベンジでまた機会を設けて来てください」と説明して納得してもらった。そして受講生には「本日の午後から予定していた個人またはグループによる小単位での自由行動を、現在から夕刻17:50までの8時間余りに拡大します。訪問した場所とそこでしたこと、各場所への到着時刻と出発時刻をフィールドノートにメモして、夕食前ミーティングで発表してください。単なる物見遊山の観光ではいけません」、そして事前集金していた乗船料・長崎市施設利用税の合計額4,350円/人は、350円を夕食時の飲料代に充当して、一人あたり4,000円を返却します」と伝えた。

ところで、大学院生と現職教員は一部が学部学生と別メニューなので、「11:00に中心商店街の一角にある『吉宗』という店に来てください。ここで昼食を摂りつつ午後のコースを説明します」と告げた。後に聞くと大学院生は、全員で軍艦島ミュージアムに出かけたらしい。ここは入館料が少し高い施設であるものの、展示は上質でリアリティもある。そのためか、後述する昼食時に尋ねたところ「素晴らしかった」「半ば上陸できたような気持ちを味わえた」との感想が大多数で、大学院生は夕刻のミーティングでも当該施設の面白さを熱っぽく語ってくれた。

大学院生と長崎港ターミナルで別れた筆者は、三々五々にグループで各所へ散っていく学生たちを見送った。その時に数名からなるグループが高島航路の乗船券を持って棧橋へ行く姿を見た。「事前学習会で扱った本学入試の過去問を解いた影響かもしれない」と感じ、過去問に取り組ませた効果を痛感した。

全員が様々な場所に向けて出発したあと、筆者は返金に要する紙幣を準備しなければならなかった。必要な金銭は、筆者も含めて4,000円×47人=188,000円である。筆者は、封筒に入れて準備していた金銭に12,000円を加えて市中で銀行を探した。この時に痛感したのが「最近の都市部では、窓口のある銀行店舗が殆どないという事実である。これは経済地理学的な観点に立てば、かなり面白い説明ができるだろうが、その時の筆者にはそれを楽しんでいる余裕など全くなかった。

銀行店舗は、仮に見付けてもキャッシュディスペンサーだけの支店・営業所・出張所が大部分で、そこには両替に対応できる機器が殆どない。結局、新地中華街にある十八親和銀行本店まで移動し、ここで準備した20万円を2,000円札の帯緘に両替してもらった。両替で得た札束は受講生たちの無念が詰まったものなので、その額面

は20万円ながら想像以上に重たかった。

大学院生たちの一行と約束した「吉宗」で落ち合い、我われは長崎ではかなり有名な当店の茶碗蒸しセットを楽しんだ、その後は中心商店街の様子を見つつ、中心性の高低で構成店舗に差異が生じること、長崎は坂の多い都市なので平坦地が限られてしまい地価が相対的に高くなっていること、平坦地の少なさが自転車の少なさと深く関係していること説明した。一行は思案橋横丁の東入口付近を進んでカステラの福砂屋の本店に至った。Y字路に建つ同社の建物は和風で美しく、この建物自体が長崎有数の観光地にもなっている。これは大波止電停から至近の場所にある文明堂本店も同様である。

少し暑かったが、福砂屋本店の前で「右側の道を道なりに進むと新地中華街に出ます。中華街を観てから石橋行き路面電車を終点まで乗って少し歩くと『グラバースカイロード』という斜行エレベーターがあります。無料で乗れます。一番上まで上ってテラスから望む『坂のまち・長崎』の風景は格別です。その場所から少し歩くとグラバー園の入口があるので、そこから入って見学しながら下りると、グラバー園を出たところから大浦天主堂や南山手重要伝統的建造物群保存地区は至近距離です。最終目的地とした出島は、過去の姿に忠実な復原を心掛けて作った施設で、なかなかの魅力がある施設です」と伝えた。夕刻のミーティングの際に大学院生の行程の紹介を聴くと、ほぼ上記と同様のコースを巡っていた。

学部生の小グループは多種多様なコース設計をしており、今回はレンタカーを借りて佐世保やハウステンボス、長崎周辺では公共交通だと時間ロスを生じやすいペンギン博物館など、今回は自由設計できる時間が長かったため、約1/3のグループが自動車を活用して自在なスポット巡りを設計していた。こうした広範囲の移動の場合、どうしてもガイドブック等で取り扱われている施設への訪問が多くなり、「行った」「見た」がXやFacebookにアップされるなど、いわゆる「映える」映像の撮影が目的化してしまう恐れがある。

今回は「軍艦島上陸クルーズ」が欠航になるアクシデントがあったので、受講生に対して行動範囲の規制を強くすることを避けたが、こうした不測の事態が生じなかった場合は、相応の行動範囲の規制をした方が実効的な授業になるはずである。こうしたなか、午前中から高島へ渡航してレンタサイクルを借りて約3時間をかけて島を巡って端島（軍艦島）を目視し、正午過ぎに長崎港に戻ってからレンタカーを借りて更に広域を巡った女子学生のグループがあった。行先は第1日目に突然の集中豪雨で訪問を車中からの遠望に切り替えざるを得なかった南島原市の原城址である。距離がある場所なのでミーティングの開始時刻を考えると褒められた計画ではない（事実ミーティングには若干の遅刻があった）ものの、つぶさに観察できなかった地点を再訪する気概は、計画の無謀さを帳消しにするものであった。

夕食前に約1時間開催したミーティングでは、各グループから訪問した場所と当該地点での行動や感想を発表してもらい、ほかの受講生の翌日の行動計画に資するようにした。各グループにとって「訪問したいが第2日目には訪問しなかった場所」が取り上げられることも多かったはずで、このミーティングは短時間ながら濃密なものとなり、実施した甲斐があった。また、当日の訪問地と同行者、各々の到着・出発時刻、当該地点でしたことの3点をフィールドノートを元にまとめさせて、ミーティングの最後に集めた。この回収には大学院の受講生の協力を仰いだ。

ミーティングの際、少し行動範囲が広過ぎる印象を受けたため、長崎市街地に観るべきもの、訪問すべき地点が散在していることを話し、広島と長崎が同様に原爆投下を受け（原爆の仕様は異なる）、その悲惨な被害から立ち上がる姿が「怒りの広島、祈りの長崎」と呼ばれること、原爆資料館や平和公園・平和祈念像はぜひ訪問して欲しい旨を伝えた。受講生が教員になって修学旅行の引率等で長崎を再訪した際、これらの平和教育の聖地は、児童生徒に見せるべき場所として外せないからである。そして現在の学生たちには馴染みが薄い楽曲であることを承知のうえで、筆者はメロディーが美しく歌詞に静かで強いメッセージ性が盛り込まれている『長崎の鐘』を歌った。

第2日目の夕食は、未成年者には飲酒厳禁を告げたうえで、20歳以上の希望者には若干のアルコール（ビールのみ）を提供した。前日の夕食と同様、長崎名物の卓袱料理を簡単にした食事だった。食事内容については不満がなかったものの、飲料に関しては「飲めない者は損」「ソフトドリンクが不足」等の不満が出た。最近では20歳

を過ぎていても飲酒しない者が増えているので、第1日目の夕食と同じく全員飲酒厳禁で臨むのが穏当かもしれない。いつか後任の地理学教員が採用に至れた場合は、このあたりを慎重に考えていただけるよう書き残しておきたい。

4.3 現地授業第3日目（8月22日（金）、長崎市の15:00までの最高気温：32.4℃ [12:50]）

この日も暑い一日だったが、朝食の際に受講生に尋ねると「この程度の暑さなら京都より断然過ごしやすいです」との声が大勢を占めた。第3日は今回の授業に関係する荷物を全て収容したキャリーケース等を受講生全員が持っているため、路線バスに大勢で乗ることは望ましくない。受講生には「グループ毎で一緒になり、グループ間では分散してバスに乗ること」と告げた。この日の行動は「前夜のミーティングにおける他グループの発表内容を参考にして自主的に行程を設計し、それを整理して当日中に筆者へ宛ててEメールで送信する」というものである。

前夜のミーティングの際に「長崎市街地にも見所は大変多い」旨を告げたことが奏功してか、あるいは当日中に帰宅しないと主免実習の準備ができないという3回生が多かったのか、当日深夜に締め切った最終日の課題をみると次のような傾向が読み取れた。

- ① 長崎空港からの飛行機で帰洛の途に就く一部の者を除いてレンタカーの利用は低調である。
- ② 大多数の受講生が長崎市街地で名所訪問、昼食グルメ、土産物の品定めをしている。
- ③ 入場料金・利用料金の高低には無頓着な者が多く、「行きたい場所に行く」「見たいものを見る」「食べたいものを食べる」という行動パターンが大勢を占める。

このようにみると昨今の学生たちは、自主的に自身や周囲の意見に折り合いをつけながら計画立案する能力に長けていると判断できる。多くの観光客でにぎわう都市を対象にした現地授業では、地元在住者や他の観光客に団体行動で迷惑をかけてしまう懸念もあるので、こうした自由設計行動は導入価値が高い授業実施方法ではないだろうか。ただし、この方法を採用する場合は、周到な事前学習を通じた訪問地の徹底理解、現地に関する授業担当者の豊富な知識が不可欠である。そうでなければ、有効な補足コメントや解説を現地フィールドやミーティングで伝えられないので、事前学習等での文献研究や授業担当者の現地についての知識が脆弱な場合は、受講生たちの自由行動は可能な限り少なくする方が良いように思う。

V. 成績評価と今後の展望—むすびに代えて—

相応の受講生数を集めた科目の場合、昨今の大学ではGPA規準に照らし合わせた成績評価が強く求められる。本学もその例外ではなく、おおむねの評価が合格者総数に関して「秀および優：良：可＝3：4：3」となっている。筆者は受講生が30名以上いる担当科目において上記の規準をおおよそ満足する成績評価をしている。その手順は、①各種提出物・受講態度・中間テスト（実施しない科目もある）・期末試験または期末レポートを評価素材として絶対評価の得点を導出する、②得られた総得点を降順でソーティングして、上位から順に秀・優・良・可に分ける相対化を行う、③ミスがないかを再確認して成績をシステムに入力する。

この絶対評価の結果を相対化する方法は、評価を客観化できる優れた手法である。筆者がそれを痛感したのが科研費の審査をした時である。優劣の差が僅少な場合でも冷徹に区分することができるので、結果の区分で悩むことが少なくなる。ただ、受講生にとっては「頑張ったのに、どうして……」との気持ちが芽生えることは当然多いと推察される。とりわけ今回のように、現地授業でほぼ3日間にわたり行動を共にするような授業の場合はなおさらであろう。そこで筆者は他の担当授業科目と同様、事前学習会で次のように告げた。

「近頃は『秀』や『優』に拘泥する方が以前より多いように感じますが、たとえ『可』であっても『よろしい』という意味で、正真正銘の合格です。『良』なら『よくできました』のスタンプを押してもらったようなものです。そして私の場合、『優』は自身が研究者の駆け出しであった大学院生の頃と比較して『同等の水準に達している』と認めた場合、さらに『秀』は『あの頃の自分より凄いかも……』とみなした方々に付けています。この程度の

を表現した「欠航」が相応に大きく出現したこととあわせても、天候（外洋の時化）による軍艦島上陸クルーズの中止が受講生の心にダメージを与えたと捉えるべきであろう。フィールドトリップは何が起こるか想像できない部分があるとはいえ、台風の影響の大きさを改めて感じた出来事だった。

付記

本稿および下記の文献表に記した香川貴志（2026b, 2026c）の執筆に際し、訪問地域の事前調査において現地の各教育委員会の皆様、文献収集では京都教育大学附属図書館の職員の皆様に多大なお力添えをいただきました。訪問地域の予備調査の際には、JSPSの2021～2025年度科学研究費基金（基盤研究（C））「小学校社会科副読本を活用した地理・地理学教育の裾野拡大とボトムアップ」（研究代表者：香川貴志，課題番号：21K01044）を使用しました。お世話になった上述の方々や機関・制度に対して、末筆ながら記して御礼申し上げます。なお、本研究で紹介した授業実践上の工夫については、2025年8月24日に筑波大学で開催された2025年度日本地理教育学会大会において発表しました（筆者の体調不良により発表要旨のみでの参加）。

引用・参考文献（本稿の表1に列挙した文献はリストから省いた）

- 香川貴志（2025）（書評）原田宗彦著『アクティブシティ戦略—暮らしているだけで健康になるまちづくり—』、『地理学評論』, 98(6), pp.402-403.
- 香川貴志（2026a）フィールドトリップに向けた成果共有による効果的な文献研究の提案—天草・島原・長崎を対象として—。『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』, 8, pp.99-108.
- 香川貴志（2026b）天草・島原・長崎を巡るための事前学習（第1報）—天草, 原城, 島原城に関する文献研究—。『京都教育大学環境教育研究年報』, 34, pp.11-24.
- 香川貴志（2026c）天草・島原・長崎を巡るための事前学習（第2報）—雲仙岳, 長崎, 高島, 端島（軍艦島）に関する文献研究—。『京都教育大学環境教育研究年報』, 34, pp.25-39.
- 高島教師の会編著（1989）『わたしは高島が好きです—閉山 長崎県高島町立高島小学校の教師と子どもの記録』教育資料出版会。

参考Webサイト

- 国土交通省気象庁（2025）過去の気象データ検索（毎日更新）
<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php>（2025年10月26日最終閲覧）
- ユーザーローカル社（2025）テキストマイニング—ワードクラウド（スコア順）
<https://textmining.userlocal.jp/>（作業年月日：2025年9月3日）